－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－

参　　　　考　　　　資　　　　料

－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－

**(1)受賞者について**

1　氏　名　　　ウィリー・Ｆ・ヴァンドゥワラ（Willy F Vande Walle）

2　生　年　　　1949年

3　現　職　　　ベルギー　ルーヴァン大学名誉教授兼特任教授

4　略　歴

　　　1949年　　　　ベルギー・ウェストフランデレン州生まれ

1972年　　　　ベルギー・ゲント国立大学文学部東洋学科卒業

1972年-75年 　文部省奨学金学生として大阪外国語大学・京都大学に留学

1976年　　　　ゲント国立大学博士（東洋言語学）

1977年　　　　国際交流基金特別研究員

1978年-81年 　ルーヴァン大学現代言語学院日本語講師

1980年-81年　 同大学東洋学科日本文化客員講師（助教授）

1981年-89年　 同大学東洋学科日本学准教授

1989年-2015年 同大学東洋学科日本学主任教授

1989年　　　　ユーロパリア・ジャパン科学委員会会長

1993年　　　　国際日本文化研究センター客員教授

1997年　　　　関西大学東西学術研究所交換研究者

2003年-　　　 日本資料専門家欧州協会会長

2015年-　　 　ルーヴァン大学名誉教授兼特任教授

（受賞歴）

2000年 日本国際交流基金奨励賞

2006年 勳三等旭日中綬章

2009年 関西大学名誉博士号授与

（主要著作等）

著書

○Basho, dichter zonder dak - Haiku en poëtische reisverhalen（芭蕉―宿なしの俳人：俳句と紀行文の翻訳と研究） Leuven: Peeters, 1985

○Haiku: van scherts tot experiment（俳句―戯れから実験へ） Amsterdam: Amsterdam University Press, 2003

○Een geschiedenis van Japan: Van samurai tot soft power（日本史―侍からソフト・パワーへ） Leuven: Acco, 2007

○Een geschiedenis van het Chinese keizerrijk tot 1600: De duurzame zoektocht naar imperium（1600年までの中国の歴史―帝国への恒久的な探求） Leuven: Acco, 2007

共著

○Japan: Het onvoltooide experiment（未完成の実験としての日本）〔& Ludo Meyvis〕 Tielt: Drukkerij-Uitgeverij Lannoo, 1989

○De dag van het slaatje（サラダ記念日の蘭訳）, by Tawara Machi.〔Willy Vande Walle, trans. with Bart Mesotten〕 Tielt: Drukkerij-Uitgeverij Lannoo, 1989

編書

○L'homme et son image / De mens: beeld en evenbeeld（人間とそのイメージ）〔& al.eds.〕 Brussels: Europalia Foundation International, 1989

○Dodonæus in Japan: Translation and the Scientific Mind in the Tokugawa Period（日本におけるドドネウス―徳川時代における翻訳と科学思考）〔& Kazuhiko Kasaya, co-ed〕 Leuven & Kyoto: Leuven University Press & International Research Center for Japanese Studies, 2001

○Orientalia: Études orientales et bibliothèques à Leuven et Louvain-la-Neuve（オリエンタリア―東洋学とルーヴェンとルーヴァン＝ラ＝ヌーヴの図書館）〔& Paul Servais, ed〕 Symbolae Facultatis litterarum Lovaniensis B, vol. 20. Louvain: Leuven University Press, 2001

○The History of the Relations Between the Low Countries and China in the Qing Era (1644-1911)（清朝時代 (1644-1911)における中国とオランダ・ベルギー間との関係史）〔& Noël Golvers, co-ed〕 Leuven Chinese Studies XIV. Leuven: Leuven University Press, 2003

○Japan & Belgium: Four Centuries of Exchange（日本・ベルギー―四世紀に亘る交流） Brussels: Commissioners-General of the Belgian Government at the Universal Exposition of Aichi 2005,Japan, 2005

　　　※書名の日本語訳は受賞者によるもの

**(2)贈呈理由**

ウィリー・F・ヴァンドゥワラ教授は1949年ベルギーに生まれ、ゲント国立大学文学部東洋学科でアジア・日本学を研究した後、来日、主として京都大学において日本学、とくに仏教史を専攻して日本研究の端緒をひらいた。

以後業績を重ねて現在、ヨーロッパにおける日本研究の重鎮と目されるに至り、ベルギー最大の総合大学・ルーヴァン大学の名誉教授兼特任教授をつとめられる。

さて、氏には名著も多く『芭蕉―宿なしの俳人：俳句と紀行文の翻訳と研究』（Basho, dichter zonder dak - Haiku en poëtische reisverhalen 1985年）『未完成の実験としての日本』（Japan: Het onvoltooide experiment 1989年）などが知られているが、何といっても圧巻の著書は『日本史―侍からソフト・パワーへ』（Een geschiedenis van Japan: Van samurai tot soft power 2007年）であろう。

この517ページにおよぶ大著は質量ともに他の追随を許さない名著である。その理由を述べれば、まず第一に広汎な視野がある。構成は縄文弥生年代に始まり、645年の日本古代史の大きな画期を立てながら、その中で国家体制の整備、聖徳太子の登場そして外交関係の諸問題が述べられる。氏は今も外交史を専門とする講座を担当するが、外交史のみならず、その上に各時代の文化に必ず多くのページをさいて卓見を述べる。まさにこのようなスタイルこそ、氏の根幹の歴史認識である。

そこで第二の理由、すなわち文化への配慮を重視する点をあげる必要がある。氏は上掲『芭蕉―宿なしの俳人：俳句と紀行文の翻訳と研究』からも知られるように、詩や宗教を例とする精神性を重視する。

氏はさる対談で現代日本において日本的なものが減ってきていると嘆く（「Ｒeed」関西大学ニューズレターＮo.29、2012年）。「未完成」の美を目ざとく見つめる碩学の目が、日本人に反省をよびかけているのである。

そうした点からいえば、大著『日本史―侍からソフト・パワーへ』は、それに先立つ氏の業績の集大成といってもよいだろう。研究者として到達した、最高の舞台を示すといってもよい。

また、上掲の対談で氏は日本の学生に対して、自国の文化を理解するためには、異質なものを理解する「対照的な思考」と「融通の利く人間」という２点が重要であることを指摘している。

以上の諸点から、ベルギーのアジア研究の第一人者、ヴァンドゥワラ氏に山片蟠桃賞を贈呈することは、最も適切であり、ユーラシア大陸の両端から未来への志向を展望する上で、まことに意義深いものがある。

 **(3)受賞者メッセージ**

ベルギー

ルーヴァン大学名誉教授兼特任教授

ウィリー・Ｆ・ヴァンドゥワラ

山片蟠桃賞の存在は少なくとも前世紀八十年代の後半から知っていますが、自分がいずれその山片蟠桃賞の受賞者に選ばれるとはついぞ考えた事はありませんでした。受賞者に選定されたお知らせに接した際、誠に身に余る光栄で驚きを言葉で表すことはできませんでした。

先行の受賞者の顔ぶれを一見して皆様が一流の学者であるのに気付き、自分がその末席に列するのに相応しいものかなと疑問に思いました。英語圏の受賞者が一番多く、その次は中国、フランスやロシアです。所謂小国出身の受賞者は、オランダのフォス先生だけが見当たります。もうかなり前に他界されていますが、親しくして下さった、畏友というべきか師友というべきか、私にとって模範的な存在でした。小国といえども、明治初期にベルギーを見学した周布公平が言うように、国土と人口よりも国民の自由が大事だと言っていますが、フォス先生と肩を並べて小国の出身者として選ばれたことは、嬉しく思っています。

何故今回の山片蟠桃賞に選定されたかを鑑みるに、私なりに二つの理由が考えられます。その一つはべルギーにおける日本学の樹立に微力ながら寄与したことと、そして今年は、白日修交150周年に当たるからです。実は、150年前にベルギーと幕府の外国奉行との間に修交の交渉が開始され、条約締結に漕ぎ着けることに成功しました。

山片蟠桃賞は、大阪を象徴する在野の学者、山片蟠桃に因んで命名された賞です。大阪は商都であり、東京や京都と一味違う文化を培った地です。私の最初の滞日経験も大阪で始まり、その後京都大学に転校してからも、多くの親友や恩人が大阪やその周辺に住んでいたこともあって、ナニワとの関係が常に親密なものであり続けました。

私は一応ベルギー人ではありますが、フランドル地方に生まれ育ち、また住んでいる地もフランドルです。フランドル地方はベルギーの北半分に当たる地域で、ベルギーの人口の六割を占めております。ベルギーの分権化が進んでおり、フランドル行政府が日本に文化センターを設置することになった際、関東地方ではなく故意に大阪を所在地として選択しました。私自身もその選択肢が賢策と、後押しをしておりました。そういう意味では私も大阪と特別な縁があると言えるのではないでしょうか。

また、受賞者に選ばれたお知らせに接した時点では、山片蟠桃の著作はまだ読んでいませんでしたが、大昔京都に留学していた時、富永仲基の著作、取り分け『』と仏教思想の批判的研究書として名高い『』を、友人を師友にして読解した、楽しい勉強の一時を思い出しました。富永仲基は、三浦梅園と山片蟠桃と並んで、大阪の町人文化を代表する最も独創的な、在野の学者として見做されています。「三百年間、其の人にる所なくして、断々たる創見発明の説を為せる、富永仲基の出定後語、三浦梅園の三語、山片蟠桃の夢の、三書のみ。・・・・・・三人皆関西に産し、而して其の二は浪華にる。」とは内藤湖南の評価です（『内藤湖南全集』第一巻）。そういう意味でも、私が本当に若かったころの留学時代から、間接ながら山片蟠桃と縁があるような気がします。学問の業績に基づいて山片蟠桃賞に相応しいかどうかは私は甚だ疑問は感じますが、関西、取り分けナニワと深い縁があることに鑑みて、僭越ながら頂戴することにしました。